

# 「考えさせられる」葬儀(十)

## 新型コロナウイルス感染症と葬儀

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、葬送儀礼に関する調査・分析を続け、その成果については『宗報』にて報告を行ってききました。

こうした調査・分析を今後も継続する必要性はもろろんです。が、現在、世界中で感染が拡大している新型コロナウイルス感染症は、葬送儀礼をはじめとする寺院活動に大きな変化を強制的にもたらしている、と言えます。そこで、社会を揺るがす非常時における葬送儀礼を考えていく必要があるとの観点から、『宗報』二〇二〇年八月号に続き、新型コロナウイルス感染症拡大にともなう葬送儀礼の変化とその影響について検討したいと思います。

今回は、「新型コロナウイルス感染症が葬儀に与える影響」

をテーマとし、当研究所委託研究員である小谷みどり氏（シニア生活文化研究所所長）と実施したオンライン会議の内容を報告いたします。

### 一、新型コロナウイルス感染症の 寺院・仏事への影響

新型コロナウイルス感染症の影響、あるいは、厚生労働省より発表されている「新しい生活様式」（新型コロナウイルス感染症専門家会議からの提言〈二〇二〇年五月四日〉を受け、実践例が発表された）の影響は、寺院活動へ大きく影響を与えています。端的にいえば、国際宗教同志会における講演（二〇二〇年

六月三日、大阪市大正区金光教泉尾教会)において東京工業大学教授の弓山達也氏が、

人との濃厚なつながり、つまり「3密」こそが宗教の本質

と述べられている(『中外日報』二〇二〇年六月五日記事)ように、寺院活動の本質的・根本的な部分を強制的に成り立たせなくしているということです。

こうした「つながり」をいかに補うかという課題に対し、現在では「オンライン」の活用が推進されています。しかし、葬送儀礼をはじめ、墓参り、月忌参り、寺院での法要などに対してすべて「オンライン」で対応していいのか。新型コロナウイルス感染症拡大への不安が無くならない中で、いわゆる仏事そのものがどのように変化していくのかまったく見通しが立ちません。

そのため、「新型コロナウイルス感染症の影響とそれへの対応」が喫緊の課題として取り上げられるのですが、小谷氏は、そうした課題の重要性を認めつつ、新型コロナウイルス感染症に直接関わらないような問題、すなわち、葬送儀礼や墓参りなどが持つ根本的課題にこそ取り組むべきであると述べられました。

## 二、葬儀・お墓に関わる社会課題

当研究所では、これまで何度も小谷氏から問題提起・提言をいただいています。それらは、『宗報』二〇一八年七月号『考えさせられる』葬儀(二) 葬儀をめぐる現状(社会問題としての葬儀 前編)」、八月号『考えさせられる』葬儀(三) 葬儀をめぐる現状(社会問題としての葬儀 後編)」、『宗報』二〇二〇年五月号「第十一回宗勢基本調査に向けて 第四回 統計からみる葬儀―つながりの変容が葬送に与える影響―」にて報告をしています(すべて当研究所ウェブサイトより閲覧が可能)。

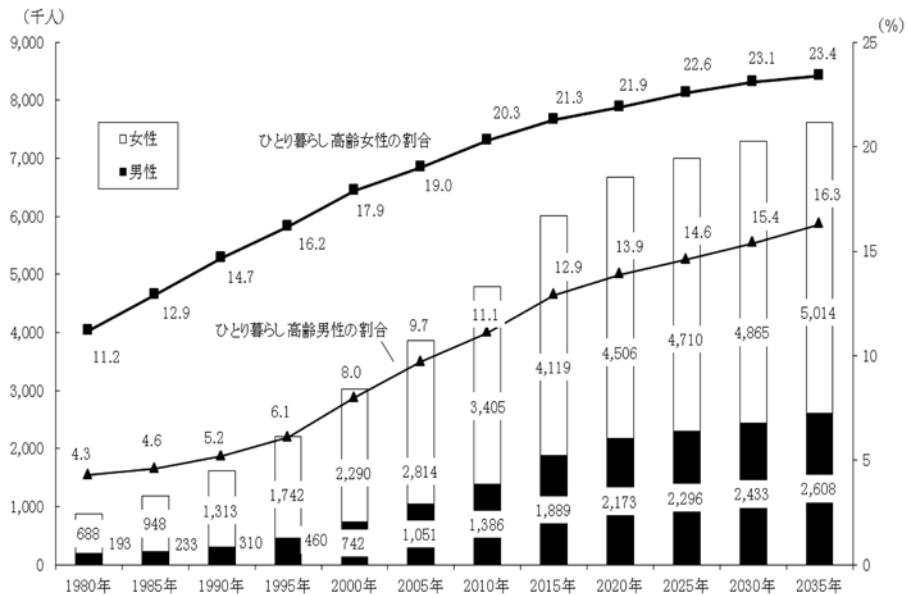
そのため、ここでは葬送儀礼を中心に新型コロナウイルス感染症の影響との関わりが深い論点を提示することとします。

小谷氏は、葬送儀礼に大きく影響する現代社会の状況として、「死亡年齢の高齢化」「高齢者の核家族化」「ひとり暮らし高齢者の増加」「生涯未婚率の上昇」などを提示されました。こうした状況から導き出される結論を、小谷氏は、

これまで亡くなってきた人と、これから亡くなる人とは違う

という言葉で表現されました。これは強い表現ですが、次のような状況を背景にしています。

### ひとり暮らし高齢者の増加

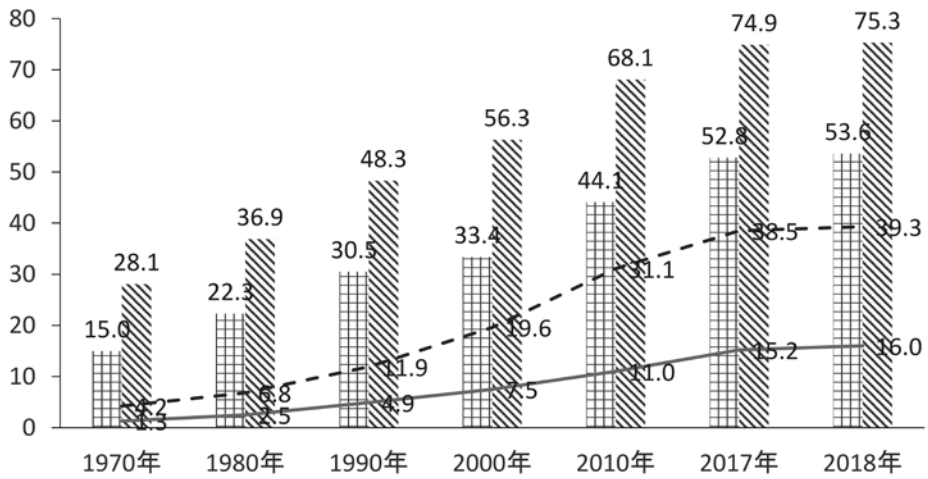


厚生労働省「国民生活基礎調査」

生涯未婚率（五十歳時の未婚率）は、特に男性の変化が顕著であり、一九九五年に八・九九%だったのが、二〇一五年には二三・四%に上昇し、二〇二五年には二七・六%にまで上昇すると推計されています。問題は単に数値の上昇だけではなく、一九九五年に未婚だった方が、二〇二五年には八十歳になるという点にあります。つまり、生涯未婚率が上昇し始めた一九九五年頃に五十歳だった方が「これから」亡くなっていく時代になり、加えて、生涯未婚率は上昇し続けているのですから、「これから亡くなる」方には、「家族・親族が（ほとんど）いない」という状況は当たり前になると考えられます。また、「高齢者の核家族化／ひとり暮らし高齢者」は、二〇〇〇年頃から増加しはじめ、現在では高齢者の六〇%近くがひとり暮らしだとされています。しかも、その高齢者の方々に子どもがいない状況も増えています。

つまり、「これまで亡くなってきた人」とは、三世同居とまではいかずとも家族がある人や、亡くなった人がいれば葬送儀礼をはじめ墓参り、法事などを行ってくれる親族や友人が存在している人のことです。「これまでの葬儀」は、こうした家族・親族の状況を前提にしていました。しかし、「これから亡くなっていく人」は、そもそも家族・親族がいない人、社会や地域とのつながりが希薄であるか、まったくない人のことを意味しています。しかも、こうした人はこれから増加するであろうという予測ではなく、すでに多く存在しているのであり、そうした

80歳以上、90歳以上で亡くなった人が全死亡者に占める割合



■ 80歳以上 男性 ■ 80歳以上 女性 — 90歳以上 男性 - - 90歳以上 女性

人がこれから亡くなっていく時代になるといのが小谷氏の言葉の背景にあります。『宗報』二〇二〇年五月号「第十一回 宗勢基本調査に向けて 第四回 統計からみる葬儀―つながりの変容が葬送に与える影響―」において小谷氏は、

ひとり暮らし高齢者が亡くなったとき、果たしてその死を悼む人がどのくらいいるのだろうか。

とも述べられています。

誰かが亡くなれば、その死を悼み、悲しんでくれる人がいる。そうした人びとが葬送儀礼を行う。この葬送儀礼を成り立たせていた「当たり前」は、すでに崩れ去ろうとしている。小谷氏は、この根本的課題に向き合わなければならないことを強調されました。

### 三、「新しい生活様式」

小谷氏は、新型コロナウイルス感染症の影響が大きくなっていく今だからこそ、葬送儀礼や墓参りなどが持つ根本的課題にこそ取り組むべきであると指摘されました。その理由は、新型コロナウイルス感染症の拡大や「新しい生活様式」の推進によって、根本的課題がより悪化してしまう。あるいは、新型コロナウイルス感染症への対応だけを模索することが、根本的課題を

見えなくさせてしまうからでした。

葬送儀礼は、一般的に「葬儀」といわれる時間だけを指しているわけではありません。臨終勤行、通夜、葬儀、そして葬儀後に続く仏事などを含んで考えなければなりません。また、浄土真宗において説明される意義以外にも、社会的な役割をも担っています。多様な意義や役割を持つからこそ、読経、莊嚴、故人との対面、葬儀に参列し遺族や有縁の人びととの会話、ともに食事をするなど「死が現前に存在する場」でなければ成立しえないことが葬送儀礼には必要だったはずです。こうしたことが果たして「オンライン」で補うことができるのでしょうか。これは「新しい生活様式」の実践例のうち、「冠婚葬祭や親族行事」において「多人数での会食は避ける」「風邪の症状があるなら参加しない」などと示された状況で、これまで葬送儀礼が担っていた役割をどのように人びとに理解してもらい、葬送儀礼を執行していくかという問題です。仮に葬送儀礼を取り巻く社会状況が悪化し、その上に「新しい生活様式」が定着していくのであれば、これまで当たり前とされてきた葬送儀礼だけでなく、葬送儀礼が持つ伝統・慣習・文化も衰退してしまうのではないか。このように小谷氏は問いかけられました。私たちは小谷氏のこの問いかけを、単に伝統や慣習がなくなってしまうという意味ではなく、「報恩感謝」の思いをめぐらせ、「法縁」にであう場がなくなってしまうことにつながるという大きな課題だと受け取らなければなりません。

先に指摘したような「オンライン」に関する問題点は認めながらも、「オンライン」の利点ももちろんあります。例えば、高齢の方や病院や施設に入っていらっしやる方、遠方に住まわれている方など、葬儀に行きたくても行けない方が「オンライン」であったとしても参列できることです。しかし、ここで小谷氏は一つの問いかけをされます。「ひとり暮らし高齢者」「高齢者の核家族化」の問題とは、「オンライン」でつながりが作れるかどうか以前に、そもそも「つながる人がいない」という孤立の問題と無関係ではないのではないか、という問いかけです。新型コロナウイルス感染症対策として、「つながりが希薄になった人にオンラインという新たなつながりの方法を」という方向があることは認めた上で、それでは「つながりがそもそもない人はどうするのか」。すなわち「オンライン」という通信手段の活用以前に存在している課題にこそきちんと向き合い、社会の中で孤立化し、無縁となっている人、そしてそのような方への葬儀を考えていく必要性があるのではないかとのことです。

#### 四、寺院・僧侶の可能性

現代社会、そして、新型コロナウイルス感染症の拡大や「新しい生活様式」の推進がもたらす葬送儀礼への影響を指摘した上で、小谷氏は、寺院・僧侶だからこそ持つ「強み」を再認

識する必要性を示されました。その「強み」とは、「多様な人材とつながっていること」「個人のことを知りうること」です。冒頭に、「人との濃厚なつながり、つまり『3密』こそが宗教の本質」という言葉を引用したように、寺院・僧侶だからこそ「つながれる」こと、「つながりから得られること／得られたこと」があり、その積み重ねが仏事の前提を築いてきたはずです。その蓄積された「つながり」、あるいは「経験」を基とすれば、宗派、寺院と家、門信徒という枠組み（タテ）だけでなく、ひとり暮らしである、伴侶に先立たれた、趣味が同じなどといった悩みや喜びを共有する人がつながりを作れるような枠組み（ヨコ）を形成していけるのではないか。また、現代においてそうしたことが可能なのが寺院・僧侶ではないか。このように小谷氏は提言されました。

## 五、まとめとして

小谷氏のご指摘は次のようにまとめられると思います。

新型コロナウイルス感染症への対応にとらわれすぎるのでなく、葬儀の縮小化・簡易化の背景にある社会状況をしつかりと把握しなければならない。

新型コロナウイルス感染症がもたらすあまりにも大きな変化

の前で、何をどのように考えていけばいいかという問いは、あまりにも漠然とした問いでした。しかし、小谷氏の提言は、そうした時だからこそ、「人が亡くなったときに葬送儀礼は、どこで、なにを、誰が、どのように、なぜ行うのか」という問いこそが重要になると再認識させるものでした。

そのことを小谷氏は、まったく親族や友人がいないひとり暮らし高齢者の葬儀を執行するとき、僧侶はどのような態度で臨もうと考えているのか。そのことをきちんと考えているのか、とも問われました。小谷氏によれば、死亡届を親族が出さなければならぬという決まりでは対応できなくなっているため、現在では親族以外でも死亡届を出せるように法改正されるほど、「亡くなった方」の状況は激変しているということです。

誰が誰のために、どのような意義や意図をもって葬儀を行っているのか。

この本質的な問いに向き合うことは、葬送儀礼の変化の一つひとつに対し、寺院・僧侶だからこそできることを見つけていくことにつながるのではないのでしょうか。新型コロナウイルス感染症の不安が拭いきれない中で、人びとが生活しているからこそ、小谷氏の問いを一人ひとりが再認識しなければならないと思います。

（報告者 岡崎秀磨・富島信海）